空からサンタを誘導 プレゼント配達を支援

日本航空専門学校が全面協力

12月23日、サンタ捜索チームは札幌市内で会見を開き、日本航空学園と合同で初の「サンタ誘導訓練」を実施したと発表した。これまで3年にわたって、サンタ捜索活動に協力してきた同学園。しかし、今年は捜索のみならず、サンタがスムーズにプレゼントを届けられるよう、サポートする取り組みを新たに始めるという。空のプロフェッショナルを養成する教育機関ならではのアイデアに称賛の声が多数集まっている。

サンタ捜索チームのさらなる大胆な挑戦が明らかになった。「今年は、新たな取り組みとしてサンタ誘導訓練を実施することにした」と三田育三捜索チーム本部長は昨日の会見で発表した。2013年から協力関係にある日本航空学園と共同で実施する。

日本有数の総合航空教育機関である日本航空学園は、山梨県を拠点に北海道、東京都、石川県などで、パイロット、客室乗務員、航空整備士、グランドハンドリングスタッフ、航空宇宙関連機器製造分野で活躍できる人材を育成。北海道内には、日本航空専門学校として千歳市と白老町にキャンパスを持っている。

これまで空からサンタを捜索するという、この学校だからこそできる大胆な捜索に注目が集まっていた。しかし、今年は生徒たちから「サンタさんもプレゼントを配ることに一生懸命で、忙しいはず。私たちもただ探すのではなく、その力になれないか」という声が上がり、学校の教員たちはその対応を検討。捜索と並行して、サンタのプレゼント配達をサポートすることを決めた。

この「サンタ・サポート」の具体的内容は次の通り。24日、25日と北海道上空を捜索。サンタに遭遇した際、その証拠を押さえつつも、サンタの困っていることや悩みをヒアリング。届け先である子どもの家までの「道順」を伝えたり、必要に応じてトナカイを先導して道案内も買って出たりすることを想定している。「プレゼントが多すぎて、サンタの手が回らなくなった」とか「トナカイがダウンしてしまった」など、万が一の事態においては、サンタに代わってプレゼントを子どもたちへ届ける仕事まで引き受けるという。

サンタ捜索とサポートには、学校が所有するグライダーなどを活用する。昼間は、北海道の同校千歳キャンパスにあるモーターグライダー（動力滑空機）を稼働。夜間はグライダーが飛行できないため、代わりに「サンタ捜索専用セスナ」を出動させる。これは、石川県輪島市の同学園能登空港キャンパスでサンタ捜索に特化して開発されたもの。パイロットは、日本航空専門学校の梅沢忠弘（うめざわ・ただひろ）学長（36）自ら操縦桿（かん）を握る予定だ。

千歳キャンパス、白老キャンパスの学生たちは、各自が学んでいる専門分野に応じたサポートを実施する。例えば、前述のサンタ捜索専用機の整備・点検は、「航空整備科」の学生が教員の指導の下で担当。「サンタ捜索」という目的のために作られた、世界にも例のない飛行機であるため、教員たちからは「学生たちに、より幅広いスキルを身に付けてもらえる絶好の機会。『自分たちは、子どもたちに夢を与える仕事をしているんだ』という実感も得られるのでは」と、目を細める。空港内で荷物の運搬などを行うグランドハンドリングを学ぶ学生は、地上でのプレゼント運搬、ソリや疲れたトナカイの移動などを担当する。客室乗務員やグランドスタッフを養成する「国際航空ビジネス科」では、ネーティブの英語教員による指導など英語スキル向上に努めているため、サンタと会話する際の通訳としても期待されている。

すでに、同学園は12月上旬から捜索チームと合同でサポート訓練を実施。捜索しつつもサンタの力になろうとする、この取り組みが新たな捜索の切り札となるか、今後も目が離せない。

（写真上）北海道の大空を飛び回る日本航空専門学校のモーターグライダー。クリスマス前後の天候を気にしながらの飛行となる
（同右）空港技術科の学生たちによるプレゼント運搬を想定した訓練。本番さながらの真剣さで実施された

梅沢学長（右）へ、願いを託す子ども達

頑張って探してね

子どもたちが嘆願書提出

「お願いです。サンタさんを見つけてください」。11日、日本航空専門学校に札幌市在住の子どもたちが訪問し、同校の梅沢忠弘学長へ「サンタ捜索嘆願書」を提出した。同校を訪れたのは、山内（やまうち）うららさん（10）、篠田来実（しのだ・くるみ）さん（10）、倉俊徳（くら・としのり）君（9）、倉克仁（くら・かつひと）君（6）、篠田貫太（しのだ・かんた）君（5）、の計5人。

嘆願書には、サンタを探して欲しいという願いや、サンタを信じていることなどが記されており、山内さんが嘆願書を梅沢学長へ渡した。同校は毎年、学生と教師が一体となり、捜索チームとともにサンタ捜索を行っており、その姿を見て、嘆願書の提出となったという。山内さんは「サンタがいると信じている。日本航空専門学校の皆さんにはがんばってほしい」と話す。嘆願書を受理した梅沢学長は「皆さんの気持ちはとてもよく伝わりました。こうした気持ちは、私たちにとって大きな力となります。捜索チームとともに全力でサンタを探したい」と言い、サンタの捜索に力を入れることを約束した。子どもたちの切なる願いを抱え、どのように捜索するのか、動向が注目される。

パイロットやCA、夢見る子どもに一足早いクリスマス

どうしん夢プロジェクト 広告企画

どうしん夢プロジェクト

サンタ捜索チームが設定していた今年の捜索テーマ「子どもの夢」。7年目の捜索となり、発見の糸口がなかなかつかめない同チームは、捜索の原点に立ち返り子どもたちの夢から捜索の着想を得ようと、「子どもの夢」というテーマを掲げた。その一環で「こどもの夢かなえます」というプロジェクトのもと、北海道新聞紙面で夢を募集していた。

飛行機搭乗体験を終え、「飛行機の仕組みがわかってよかった。上空と離着陸で動かし方が違うのに驚いた」と楽しそうに話す子どもたち＝白老町、白老滑空場

今回は苫小牧市に住む原田璃乃（はらだ・りの）さん（11）に「飛行機に乗りたい」という夢を、その妹である双子の原田梨瑚（はらだ・りこ）さん・梨紗（りさ）さん（6）には、「客室乗務員（CA）になりたい」という夢をプレゼント。夢の実現には、同チームの趣旨に共感した「日本航空専門学校」が全面協力。11月上旬、同学園白老校および「白老滑空場」で夢を実現した。

「白老滑空場」での飛行機搭乗体験では、璃乃さんの友人・宮澤音羽（みやざわ・おとは）さん（11）と田辺妃桜（たなべ・ひいら）さん（11）も参加し、同学園所有の訓練機に搭乗した。あいにく強風のため飛行は中止となったが、機内では、教員がエンジンの仕組みや空を飛ぶ原理、操縦桿などコックピット内の各種装置について説明した。

CA体験を楽しむ双子たち

「ハンドルが思ったよりも重たかった。コックピット内にはボタンがたくさんあり、操縦するパイロットは大変だと思った」など、3人は興奮した様子だった。

その後、「CAさんになってみたい」という夢を持つ梨瑚さん・梨紗さんも、同校の実習で使用されるボーイング767のモックアップ実物大模型で客室乗務員のお仕事を体験。CAの経験を持つ教員が登場し、CAの仕事内容を詳しく学んだ後、実際の機内放送の練習や機内で飲み物や食事を運ぶ練習を行った。また、客役として両親や姉の璃乃さんらに「みなさま、間もなく離陸します。シートベルトをお確かめください」「お飲物はいかがですか」などと声を掛けるなど、本物さながらの機内サービスを実践した。梨瑚さん・梨紗さんは「皆さんに飲み物をきちんと渡せてよかった」と笑顔で感想を話した。

空を飛ぶことと、それを支えること。この日、子どもたちは空の楽しさと厳しさを学んだようだ。

夢を実現するのは、容易なことではない。しかし、どんな自分になりたいかを想像しなければ、何を頑張るべきかすらわからないだろう。夢見る力は人の気持ちを前向きにさせ、自らの潜在能力を引き出す。自分の夢を尊重してくれる大人との出会いも必要だ。学生時代が一つの鍵になるだろう。学生時代は心を成長させる時間。友人や教師のさまざまな価値観に触れ、同じ目標を志す仲間と切磋琢磨（せっさたくま）することができる。

千歳市と白老町に校舎を持つ日本航空専門学校は〝想像しなければ創造できない〟という考えのもと、パイロットや客室乗務員・航空整備士などで働く人材を育成している。礼儀作法をはじめ社会に出る上で基礎となる部分を指導しながら、学生一人一人の潜在能力を引き出すための学習環境を整備。同校は日本最古の総合航空教育機関として優秀な人材を数多く輩出している。現在そして未来の航空業界を支え、創造していくのはこうした学生たちだろう。

サンタ捜索も同じではないだろうか。サンタの存在を信じ、失敗や挫折を繰り返しながらも諦めずに追い続けること。その気持ちと努力が身を結ぶと願う。

SANTA JOURNAL
学生たちの想像力が大きな原動力に

企画制作／北海道新聞社広告局

この広告企画はお子さまと楽しんでいただくため、夢のある構成となっています。フィクションを多く含みますがご理解、ご了承願います。次回は12月25日朝刊予定。

（C）北海道新聞社 無断転載、複製及び頒布は禁止します。